設問 1（授業科目名・クラス名）

設問 2（科目コード）

設問 3（回答者名）

※　以下、各選択肢の右に該当クラス数を記す。（全回答数に対する回答率も附記）

A（問 4～13）：授業担当者として教授技法や授業内容等に関し、教育活動を自己点検し、次の①～④のうち該当する丸数字を選んでください。　①:あてはまる　②:ややあてはまる　③:あまりあてはまらない　④:あてはまらない

設問 4　シラバスに沿って授業を行えた。

①:14（70%）　②:4（20%）　③:1（5%）　④:1（5%）　未回答:0（0%）

設問 5　学生の理解度やレベルを踏まえて授業内容を設定・調整した。

①:11（55%）　②:5（45%）　③:0（0%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 6　話し方、板書の仕方、機器又は器具の使い方、等が適切だった。

（教授技法の適・不適の観点で柔軟に回答してください。）

①:10（50%）　②:9（45%）　③:1（5%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 7　重要ポイントを明示し、分かり易く説明した。

①:9（45%）　②:10（50%）　③:1（5%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 8　学習意欲や知的好奇心・関心を掻き立てたり満足させる教え方ができた。

①:10（50%）　②:10（50%）　③:0（0%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 9　受講生の信頼を得るような授業態度で授業に臨んだ。

（授業を周到に準備し、休講・遅刻を極力控え、進行を妨げる行為（私語など）に対して毅然として実施した。）

①:11（55%）　②:9（45%）　③:0（0%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 10　受講者とのコミュニケーションを図りながら授業を進めた。

（発問への回答を学生に求めた/学生からの質問・発言を促した/学生の理解度を確かめながら進めた/学生の授業への能動的な参加（アクティブ・ラーニング）を促した　等）

①:11（55%）　②:7（35%）　③:2（10%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 11　授業内容に見合った予習・復習或いは発展学習を課した。

①:4（20%）　②:9（45%）　③:5（25%）　④:2（10%）　未回答:0（0%）

設問 12　総合的に判断して学生を満足させる授業が行えた。

①:10（50%）　②:8（40%）　③:2（10%）　④:0（0%）　未回答:0（0%）

設問 13　シラバスに掲げた当初の授業目標（ねらい）は達成された。

①:12（60%）　②:4（20%）　③:3（15%）　④:1（5%）　未回答:0（0%）

B（問 14～18）：FD活動についてお尋ねします。

設問 14　この授業科目に関してこの 1 年間取り組んだ FD 活動を選んでください。**（複数回答可）**

①他教員の授業参観：　4（20%）

②学内外の FD 講演会等への参加：　15（75%）

③他大学の FD 活動の視察：　1（5%）

④その他：　2（10%）・・・「学生に授業の後、意見を聞いた」「配付資料の内容の点検」

未回答：　3（15%）

設問 15　今後取り組もうと考えている FD 活動を選んでください。**（複数回答可）**

①他教員の授業参観：　5（25%）

②学内外の FD 講演会等への参加：　15（75%）

③他大学の FD 活動の視察：　2（10%）

④その他：　1（5%）・・・「学士力発展科目としての特徴づけ」

未回答：　1（5%）

設問 16　昨年度も同一科目を担当した方は、前年度の授業評価に基づき、改善した点を書いてください。

該当するクラスのうち、　　回答：13 クラス（順不同）

[1] グループディスカッションの教材開発。

定期試験レポートに関する学生間の相互評価。

定期試験採点後の個別指導。

[2] 授業評価を今年度は厳しくした。それにより、数名の単位未修得者が出た。今後、これらの学生をフォローする方法を検討する必要がある。

[3] 受講者人数が少ない中で体験的な要素をどう取り組むか

[4] アクティブラーニングの視点をどう授業に取り込むか

[5] 毎回の授業で提出してもらう出席簿に質問欄を設けてそれに回答するのは昨年までと同様だが、回答方法を変更した。昨年までは次回の授業の最初に口頭で説明していたが、この方法では時間が削がれること、ピックアップした少数の質問にしか対応できないこと、学生も 1 週間前の問題なので記憶が薄れているとともに、落ち着いてこの問題を吟味することが難しいと感じていた。そこで今年度は、講義が終わった当日中にネット上に Q&A として質問・疑問に対する回答を掲示することにしてみた。これにより、より多くの質問や疑問に答えることが可能となり、また学生にも授業が終わってすぐに復習してもらえるようになると期待している。来年度もこれを継続し、方法などの改善に努めていくつもりである。

[6] 今年度は、先年度に比べて医学部以外の受講生が減ったが、おそらく授業内容によるものだと思われる。

[7] 映像資料を増やした.

宮崎や九州の事例を多数取り入れた.

[8] クラスサイズが大きすぎるとの意見が多かったこともあり、初回の授業時に、緩やかな受講調整を試みた。学芸員資格の取得や、医学部からの登録が可能となるのが初回の授業よりも後になることなど、条件が複雑で、全ての学生にとって、公平な形での受講調整は困難であった。80 名以下までに受講定員を抑えたいが、120 名程度までしか調整ができず、次年度の調整方法についても、依然として課題である。

[9] 昨年度まで何回か担当していただいた長谷川信美先生が定年退職されたこともあり、オムニバスによる担当内容を 1 部入れ替えた。具体的には、長谷川先生が担当された鳥の観察を、西脇が担当する、キャンパス内での野生動物探索（これは、後期のフィールド体験実践講座で実施していたもの）に変更したり、岩本理事による、船塚ビオトープでの生物調査（前期のフィールド体験学習指導講座で実施していたもの）を追加したりした。

残念ながら、大雨のため船塚ビオトープでの生物調査は中止になったが、キャンパス内での野生動物探索は実施でき、イノシシ、サル、タヌキ、アナグマなどの映像と足跡などの痕跡を見て感慨深い様子であった。

[10] 受講者数が多すぎるので、討議を交えた授業は無理だが、身近な博物館の話題を授業に含めるように工夫した。また、穴埋め式のワークシートに解答を記入しながら聴講できるように、授業内容を工夫している。

[11] 映像教材、画像資料等を積極的に取り入れ、学生達にも感覚で分かるように、もともと配慮しているため、随分前に学生から、「先生の授業はこのままで良い」という評価を貰っているので、特に改善はしていない（学生からの不満もない）。

[12] 授業時の作業を増やし、話し合いの時間を設けるようにした。

[13] 基礎教育への移行期で、少人数の再受講生を対象としたため、受講生の理解力の程度にあわせて、その都度、問いかけながら授業を進めることができた。

設問 17　自分の授業の評価できる点や反省すべき点、或いは、この FD 活動レポートに関して特記すべき点があれば書いてください。

回答：　11 クラス（順不同）

[1] 受講生は全学部にまたがっており、日本国憲法という科目に全く関心のない学生が大半を占めていることが予見された。そこで、事例を中心に講義を組み、裁判例やその背景事情、身近な例を多く提示し、ストーリー性を持たせることで、学生の関心を引こうと試みた。この試みは成功し、土曜日の1限から4限までという集中講義であったにもかかわらず、学生の意欲を高く保つことができた。学生向けのアンケートにも、このことは表れているといえよう。

しかしながら、試験の結果を見たところ、必ずしも「理解」の度合いは高いものではなかった。試験問題は自分で課題を設定するという設問であったが、テーマ設定がおぼつかない学生も散見された。受講態度は真面目でありコメントシートの記入も意欲的で、またレベルの高い質問も多くなされていたが、理解度の高さは必ずしも伴っていなかったようである。本講義は事例ベースでストーリー性を持たせた講義構成にし、かつ各論併記方式でどのような見解をとるかは学生に委ねていた。そのことが、学生の理解度の低さにつながった可能性は否めない。しかしながら、学生自身に考えさせるということが本講義の一つの目的であり、かつストーリー性を持たせることが学生の関心を引くためには不可欠である以上、大幅な方針転換をすることが得策であるとは考えがたい。今後は、授業の最後に振り返りとまとめを行うなど、現在の枠組みの中での改善を行っていきたい。

なお、学生への授業評価アンケートにおいては「学生とのコミュニケーション」に関する項目（本アンケート設問１０に相当）についての点数が低いものであった。本講義では毎回コメントシートを配布し、学生から寄せられた質問やコメントにはその次の講義において回答するという形をとっていた。もっとも、大講堂において２００人近くの学生を対象とする以上、学生とのコミュニケーションの方法も限られたものになってくる。今後とも、この方式を継続する予定でいる。

[2] 授業開始直後だけでなく 30 分以上，時には 1 時間近く経過しても平気で入室してくる学生に対して，授業担当教員 1 名で対処できないことが大きな問題である（大人数の講義であり，教室が大きいため）。一定時間経過後の教室のロックなど，職員との連携が望まれる。

[3] 評価できる点は、履修した学生の人生に変化を与えた実感が持てたこと。

また、学生からつらいながらも後輩に勧めたい授業として評価されたこと。

反省点は毎回の授業に内容を詰め込みすぎること。学習の到達目標を下げることを検討する必要あり。

[4] 授業において、最初のオリエンテーションの際に、受講調整をしないといけない手間が問題である。受講希望者が多いのは良い

ことであるが、100 名を超えてしまう状況であるため、これらの問題を生じない方策を検討しなければならない。

[5] 工学部、教育文化学部の学生にも多く参加してもらえるよう、もう少し平易な講義が望ましいかもしれない。

[6] 予習・復習が必要な課題をもっと課すことが必要かもしれない.

[7] 日南市を題材に日南市長はじめ7名の関係者のゲスト講義と7／5（土）にはバスを貸し切り商店街活性化をテーマに地元中高生とのワークショップを開催し、発表も行った。テレビ取材も受けた。成果をイブニングセミナーにて報告した（7／24）。

[8] 今年は、10 年間のフィールド体験講座の歴史ではじめて、田植えができなかったり、今年初めての船塚ビオトープでの生物調査が大雨で中止など、天候不順による実施内容の変更が多かった。

また、学生の服装が野外活動に不向きである回もあり、伝達事項の徹底がうまくゆかなかったと感じた。来年はこの点を改善したい。

[9] この授業に限らないが、初めての者が理解でき、興味関心を持って勉学に励めるよう工夫しているのが、私の授業の評価できる点である。ただ、対象が古典文学であるため、予習はほぼ無理であるし、グループ・ディスカッションをさせても、ほぼ意見は出てこない（そんなことが出来るのは専門家だけ）。したがって、アクティブ・ラーニングには不向きであるが、それは内容上、致し方ない。

設問 16 でも書いたが、既に完成された授業は、それ以上の改善など不可能なため、毎年このような形式で書かされても困る。

[10] 受講生が 10 名に満たないので、講義は取りやめて、対話重視の演習とした。したがって、シラバスは無視している。

『中学生からの対話する哲学教室』をテクストに指定し、三つのテーマに絞って意見を組み立てるよう促していった。最後に PowerPoint を用いた個人発表を課している。

このスタイルがどこまで有効であったかは不明であるが、最後まで出席した学生はみな単位を取得できたことには満足している。彼らの中には、複数回人文系科目を落とした学生が含まれていたので。

[11] 課題文献のタイトル通り、「君たちはどう生きるか」を問いかけるような形で、授業内容を全体として構成し、現代社会にどう向き合って自分たちは生きていくか、その応答を受講生一人一人に求めている。そのような学びを、フィールドワークをせずして、「座学」でいかにできるかどうか、挑戦している。

設問 18　FD 活動レポートに関して特記すべき報告があれば添付ファイルで提出してください。

提出ファイル：　なし

C（問 19～21）：中期目標・中期計画のうち「コミュニケーション能力の育成」についてお尋ねします。

設問 19　授業に「コミュニケーション能力の育成」を考慮した内容が含まれていますか？

①はい：　15（75%）　　②いいえ：4（20%）　　未回答：　1（5%）

問 19 で「はい」の方は問 20、21 にお答えください。

設問 20　下記のどの点を重視しましたか？（**複数回答可**）

①聞いて理解する：　7（35%）

②読んで理解する：　6（30%）

③自分の考えをまとめて話す：　7（35%）

④自分の考えを文章にまとめる：　6（30%）

⑤討論する：　0（0%）

⑥皆の前でプレゼンテーションする：　0（0%）

⑦その他：　3（15%）　　「身体的なコミュニケーションも含めた」「フィールドで五感で感じたことを伝える」「コミュニケーション能力の重要性の理解」

未回答：　5（25%）

設問 21　「コミュニケーション能力の育成」に関して具体的な取り組みがありましたら、記述してください。

回答：　10 クラス（順不同）

[1] 毎回のリーディングアサインメント(RA)。RA 理解に関する記述式問題への回答。RA のトピックについて自分の意見の論述。RA や映像教材の内容に関するグループディスカッション。グループディスカッションの結論に関するプレゼン。レポート形式による定期試験。レポートの相互評価。

[2] 受講人数を抑えて、教員-学生間でコミュニケーションがとりやすくした。

[3] ワールドカフェといったワークショップ手法を導入した。

[4] 講義の初回に計 40 ページのプリントを渡し、これを読んで理解の助けになるようにした。

[5] 授業の中で、なるべく多くの学生に自らの考えを主張させることを試みた。

[6] ゲスト講師には残り20分を学生との対話時間としてお願いし、できるだけ多くの学生からのコメント（5名以上の発言）を促した。

[7] 毎回、教室での短い講義の後、様々なフィールドに出かけてフィールド体験をしてもらうが、そのねらいやフィールドで五感で感じたことを伝えることを目的として、毎回、京大式カードにミニレポートを書いてもらう。このミニレポートは評価対象であるとともに、担当教員が添削とコメントをつけて次週に返却することを行っている。このやりとりによるコミュニケーション能力の育成を目指している。

[8] オムニバス講義では、多くの講師が働くために必要なスキルとしてコミュニケーション能力をあげた。実体験に基づく話だったことから、多くの学生が感得していた。また、レポートの書き方について講義を行った。

[9] 今でも京都人の会話はそうであるが、本来日本語のコミュニケーションというのは、表面的な言葉の意味にとらわれず、相手の本心を読んで進めていくものである（例えば、本当はほしいものでも、体裁を考えて一回は断ってみるとか。そこで引っ込めるのは却って失礼である）。

古典はそのような会話に満ちあふれているので、そういう意味では大いにコミュニケーション能力の育成に役立つと思われるので、そうした面を強調して学ばせている。

[10] 対話的関係の重要性について、授業の内容で取りあげた。

D（問 22～25）：中期目標・中期計画のうち「地域を教材とする基礎教育/共通教育プログラム」についてお尋ねします。

設問 22　授業に「地域（宮崎）を教材とする」内容が含まれていますか？

①はい：　9（45%）　②いいえ：　10（50%）　未回答：　1（5%）

問 22 で「はい」の方は問 23～25 にお答えください。

設問 23　その内容を授業に取り上げるおよその回数を選んでください。

①１～５回：　3（15%）　②６～10 回：　2（10%）　③11～15 回：　4（20%）

未解答：11（55%）

設問 24　「地域」のどのような分野を取り上げていますか？**（複数回答可）**

①歴史・文化：　5（25%）　②政治・経済・産業：　5（25%）　③自然環境・フィールド体験：　5（25%）

④その他：1（5%）・・・「食」　未回答:　11（55%）

設問 25　「地域を教材とした基礎教育/共通教育プログラム」に該当する特色ある活動がありましたら、記述してください。

回答：　5 クラス（順不同）

[1] オムニバスでの実施内容であり、４テーマ中、2 テーマについては地域を教材とした内容を含めている。

[2] 宮崎県内で働く人物を複数人招聘し、オムニバス講義を行った。

[3] 日南市を題材に日南市長はじめ７名の関係者のゲスト講義と７／５（土）にはバスを貸し切り商店街活性化をテーマに地元中高生とのワークショップを開催し、発表も行った。テレビ取材も受けた。成果をイブニングセミナーにて報告した（７／２４）。

[4] 他にもありますが、以下の実施内容は特に地域を教材にしています。

４月２２日　西脇、神田　宮崎平野の野生動物

４月３０日　福山、井戸田他　住吉牧場での体験学習

５月２７日　國武　他　ブルーベリー茶への期待

６月　３日　神田他　大淀川の自然学習

６月１７日　水田から食と環境を考える，田植体験

６月２４日　高木他　森林の成り立ちと働き：間伐体験

７月　１日　高木 他 森と人間のかかわり：下刈り体験

７月　８日　岩本、神田、西脇 船塚ビオトープでの自然観察

７月１５日　神田、井戸田　加江田川河口域で魚類調査

[5] 平安文学はもともと京都のものなので、この科目に宮崎の文物を取り入れるのは難しい。

大学入門セミナーなどでは、近所の神社の調査などを取り入れている（意外に学生の受けも良い）。